

絵画鑑賞による心理的效果 — 気分の変化を指標として —

渡邊 彩・島谷 まき子

Mental Effect of Picture appreciation — from an index of the change of feeling —

Aya WATANABE and Makiko SHIMATANI

This fundamental study investigated if picture appreciation could be established as a form of psychotherapy by focusing on changes of feeling as an index of the mental effect of picture appreciation, in addition to the language description method, which is a form of picture appreciation therapy. Participants were 30 males and 30 females. We examined whether the mental effect differed depending on the type of picture, its impression and participants' taste. Seven factors were extracted by factor analysis of measures of current feelings. Results indicated that when the impression created by a picture was positive, the mental effect of picture appreciation changed positively regardless of the type of picture.

Key words : Picture appreciation (絵画鑑賞), the Language description method (言語的描写法),
Mental effect (心理的效果), Change of feeling (気分の変化)

問題と目的

はじめに、芸術療法 (art therapy) とは、「様々な芸術的諸活動を手段とし、よりよい人格の統合や、心身の健康を回復することを目的とする心理的治療全般のこと」(中島・安藤・子安・坂野・繁樹・立花・箱田 1999)である。

芸術療法 (art therapy) にも様々な種類がある。その中でも、絵画療法と音楽療法が一般的である。音楽療法には、楽器を演奏するという能動的な療法と、音楽を聴くという受動的な療法の2つのタイプがある。しかし、絵画療法は、音楽療法よりも早期に発展しながら、描画という能動的な療法が主であり、絵画鑑賞という受動的な療法についての実践や研究はほとんどなされていない。絵画療法にも鑑賞という受動的な療法が成立するのではないかと考えられる。

また、絵画鑑賞は美術館で行なわれるだけではない。病院、ホスピス、自宅など、あらゆるところに絵画は飾られ、それを見る人間に安らぎを与えている。すなわち、絵画鑑賞は、毎日を心身と

もに健康に過ごすための身近な道具の1つになっていると考えられる。そして、描画よりも鑑賞の方が日常的であり、描画の上手下手が気にならないため、絵画鑑賞は描画に苦手意識のある人にも抵抗の少ない絵画療法として成立しやすい可能性が期待される。さらに、描画への興味を生じさせ、描画法への導入のための療法となると思われる。

しかし、絵画鑑賞に関する研究は、哲学的・美術教育学的・認知心理学的な分野ではなされてきているが、絵画鑑賞を心理療法として取り入れようと試みている臨床心理学的研究は、今日まではほとんどなされてきていない。

以上より、本研究は、絵画鑑賞が心理療法として成立することを検討するための基礎的研究として、絵画鑑賞ならびに絵画鑑賞療法の1つである言語的描写法を行なうことによって、どのような心理的效果がみられるのかを明らかにすることを目的とする。その際、絵画鑑賞による心理的效果の指標として気分の変化に着目し、鑑賞する絵画の種類、印象、好みによって、心理的效果が異なるのかどうかを検討する。

方 法

【対象者】

対象者は20代（平均年齢21.7歳）の男女30人ずつ計60人で、そのうち呈示画Aを鑑賞した者は男性15人・女性15人の30人、呈示画Bを鑑賞した者は男性15人・女性15人の30人であった。

【時期と場所】

2003年8月26日～10月14日、昭和女子大学の大学2号館、3T31教室で行なわれた。

【呈示画A・B】

岡田・井上（1991）は、具象画と抽象画では鑑賞者の鑑賞の視点や感受するものが異なると指摘している。そこで、呈示画は具象画と抽象画の2作品を用いた。

呈示画Aは、一般的に好まれやすい傾向にある具象画であることを条件に、モネ（1873）の「ひなげし」（56×71cm）を選出した。印象派を代表するフランスの画家モネによる、愛しいカミューと幼い息子ジャンが、赤いひなげしの咲き乱れるセーヌ河畔の野原を散策している、春の野の情景を描いた作品である（後藤 1971）。荒木（1981）は、モネの「ひなげし」は、やさしい・楽しい・美しい・暖かい・柔らかい・安定した・好きなどの評価が高く、岡田・井上（1991）は、モネは好きな画家として挙げられ、印象派が好まれていると述べている。また、市原（1968）もモネの作品は好ましいとしている。

呈示画Bは、一般的に好みに差があると思われる抽象画で、モネに匹敵する知名度の高い作品であることを条件に、CMにも起用されたことのあるダリ（1931）の記憶の固執（60×90cm）を選出した。シュールレアリズムを代表するスペインの画家ダリによる、柔らかな時計が描かれた作品である。時間を象徴する時計までが飴のように溶けているという、ダリらしい着想を示す代表作である（ラドフォード 2002）。

また、本研究で呈示画として選出した両作品は、ポスターとして市販されているものであることから、生活の中での認知度は一定基準を満たしていると考えられる。

【手続き】

調査は個別に実施した。呈示画（呈示画AまたはB）はイーゼルに立て掛けて呈示し、呈示画から1.5メートルほど離れた位置に座ってもらい、

自由に絵画鑑賞を行なうよう指示した。そして、絵画鑑賞・言語的描写法を行なう過程で、以下の質問紙調査を実施した。

- (1) 絵画鑑賞前の質問紙調査：フェイスシートに記入後、現在の気分についての質問紙を配布し回答を求めた。
- (2) 絵画鑑賞：絵画（呈示画AまたはB）を呈示し、約2分間の絵画鑑賞を行なってもらった。
- (3) 絵画鑑賞後の質問紙調査：絵画の印象についてと現在の気分についての質問紙を配布し、回答を求めた。
- (4) 言語的描写法：言語的描写法は、高田・黒須（1997a）によると、ただ漠然と絵を鑑賞するよりも積極的に絵に関わる方が鑑賞の水準が深まるとされる、絵画鑑賞療法の1種である。呈示画を見て、どんな絵であるのか（客観的）、何を感じたのか（主観的）を文章で記述する。高田・黒須（1997a）は、絵画鑑賞療法のうち言語的描写法が、自己表現で観察力が養われたとして最も評価が高かったと報告しているため、本研究では言語的描写法を用いることにした。言語的描写法回答用紙を配布し、次の指示のもとに言語的描写法を実施した。
 指示：「次に、この呈示画について言葉で描写して下さい。この絵がどんな絵であるか、この絵から感じることを、自由に記述して下さい。」
- (5) 言語的描写法後の質問紙調査：再び絵画の印象についてと現在の気分についての質問紙と、最後に絵画の好みについての質問紙を配布し、回答を求めた。

【質問紙の構成】

質問紙は、フェイスシート・現在の気分についての尺度・絵画の印象についての尺度・絵画の好みについての尺度・言語的描写法回答用紙から構成されている。

- (1) フェイスシート：年齢と性別の記入を求めた。
- (2) 現在の気分についての尺度：絵画鑑賞による心理的効果の指標として、気分の変化を測定した。絵画鑑賞に伴う気分について、より多面的に幅広く調査するため、いくつかの尺度を組み合わせ独自に作成した。高田・黒須（1997a）の「自己の精神状態について」の10項目は、ポジティブな気分のみであったため、ネガティブな気分も測定するために、次の2つの尺度から

項目を選択し加えた。寺崎・岸本・古賀(1992)による「多面的感情状態尺度」の短縮版より15項目、坂野・福井・熊野・堀江・川原・山本・野村・末松(1994)による「気分調査票」より10項目を選択して加え、内容の重複する項目は1つにまとめ、計30項目からなる尺度を作成した。この尺度を用いて、絵画鑑賞前と絵画鑑賞後、言語的描写法後の3回、「まったく感じていない(1点)」から「はっきり感じている(6点)」の6件法で回答を求めた。得点が高いほど、該当する気分を強く感じていることを示す。

- (3) 絵画の印象についての尺度：この尺度は、高田・黒須(1997a)の「絵画そのものについての印象」10項目に、高木(1979)・荒木(1981)・市原(1968)・山野(2002)より、好ましいとされる絵画の印象5項目を加えた計15項目で構成されている。この尺度を用いて、絵画鑑賞後と言語的描写法後の2回、「まったく感じていない(1点)」から「はっきり感じている(6点)」の6件法で回答を求めた。得点が高いほど、該当項目の印象を強く感じていることを示す。
- (4) 言語的描写法回答用紙：対象者に回答の分量においてプレッシャーを与えないように配慮し、枠や線のない白紙(B5)の用紙の上部に、言語的描写法施行時の教示を記載した回答用紙を用いた。
- (5) 絵画の好みについての尺度：「この絵が好きである」と「この絵は親しみやすかった」の2項目について、「そうでない(1点)」から「そうである(5点)」の5件法で回答を求めた。

結 果

1. 現在の気分についての尺度の因子分析結果

現在の気分についての尺度30項目について、因子分析(主因子法によるバリマックス回転)を行った。その結果、7つの因子が抽出された。第1因子は「快活」因子、第2因子は「倦怠」因子、第3因子は「不安」因子、第4因子は「感動」因子、第5因子は「焦燥」因子、第6因子は「哀愁」因子、第7因子は「リラックス」因子と命名した(表1)。

2. 絵画鑑賞と言語的描写法による気分の変化

(1) 呈示画の種類による絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の気分の比較

2(呈示画A・呈示画B)×3(絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後)の2要因の分散分析の結果、7因子全てにおいて、交互作用は有意でなく、「呈示画AとB」の主効果も有意でなかった。つまり、呈示画AとBの種類によって、絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の気分の変化に違いはみられなかった。一方、「絵画鑑賞と言語的描写法」の主効果は、哀愁因子を除く他の6因子において有意であった。

(“快活”因子； $F(1.69, 98.15) = 12.33, p < .01$ 、
“倦怠”因子； $F(1.48, 86.02) = 5.06, p < .05$ 、
“不安”因子； $F(1.72, 99.91) = 5.86, p < .01$ 、
“感動”因子； $F(1.64, 98.94) = 16.17, p < .01$ 、
“焦燥”因子； $F(1.72, 99.55) = 15.35, p < .01$ 、
“リラックス”因子； $F(2, 116) = 14.91, p < .01$)。

そこで、それぞれの6因子において、Dunnettの多重比較を行なった。

その結果、まず“快活”因子得点は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞後と言語的描写法後に次第に低下し、絵画鑑賞前と言語的描写法後の間に有意差がみられた。“倦怠”因子得点は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞前よりも絵画鑑賞後の方が低下する傾向がみられたが、言語的描写法後には変化はなかった。“不安”因子得点は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞前よりも絵画鑑賞後に低下したが、言語的描写法後には変化はなかった。“感動”因子得点は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞後と言語的描写法後に次第に低下し、絵画鑑賞前と言語的描写法後の間に有意差がみられた。“焦燥”因子得点は、呈示画Aは絵画鑑賞前より絵画鑑賞後に有意に低下したが、言語的描写法後には変化はなかった。呈示画Bは、絵画鑑賞前より言語的描写法後に低下する傾向がみられた。“リラックス”因子得点は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞前より絵画鑑賞後に高くなったが、言語的描写法後には変化はなかった。

(2) 呈示画の印象による絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の気分の比較

鑑賞した呈示画の種類にかかわらず、対象者60人のうち、絵画の印象についての尺度の総合得

表1 気分についての尺度の因子負荷量 (*は逆転項目)

項 目	第1因子 (快活)	第2因子 (倦怠)	第3因子 (不安)	第4因子 (感動)	第5因子 (焦燥)	第6因子 (哀愁)	第7因子 (リラックス)	共通性
やる気がある	0.81							0.76
気が晴れている	0.79							0.81
はつらつとしている	0.76							0.75
気分が良い	0.7							0.77
好きである	0.61							0.63
楽観的である	0.53							0.55
*つまらない	-0.52							0.69
元気である	0.5							0.60
疲れている		0.82						0.78
だるい		0.65						0.76
つらい		0.55						0.42
無気力である		0.52						0.68
退屈である		0.51						0.53
イライラしている		0.42						0.50
不安である			0.71					0.78
そわそわしている			0.57					0.38
自信がない			0.53					0.58
むなしい			0.48					0.64
すてきである				0.71				0.71
興奮している				0.62				0.57
愛らしい				0.53				0.74
陽気である				0.51				0.68
*安心している					-0.66			0.52
焦っている					0.59			0.56
*落ち着いた					-0.48			0.53
恋しい						0.82		0.72
いとおしい						0.59		0.70
さみしい						0.44		0.60
*緊張している							-0.73	0.63
リラックスしている							0.67	0.66
因子寄与	5.06	3.60	2.63	2.51	1.90	1.88	1.63	
因子寄与率 (%)	16.87	11.98	8.76	8.35	6.32	6.26	5.44	
累積寄与率 (%)	16.87	28.85	37.61	45.96	52.28	52.28	63.98	

点の上位・下位30%を、それぞれ「印象高群」「印象低群」とした。t検定の結果、両群には有意差があった（両側検定： $t(38)=10.75, p<.01$ ）。したがって、確かに印象高群・印象低群であると言える。

次に、各7因子別に、2（印象高群・印象低群） \times 3（絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後）の2要因の分散分析を行なった。

① “快活” 因子得点の変化

分散分析の結果、交互作用はみられなかった。

「印象高群・低群」の主効果は有意でなかったが、「絵画鑑賞・言語的描写法」の主効果は有意であった（ $F(1.68, 63.79)=12.85, p<.01$ ）。そこで、「印象高群」「印象低群」それぞれにおける「絵画鑑賞・言語的描写法」の主効果について Dunnett の多重比較を行なった。その結果、「印象高群」では絵画鑑賞後に変化はなかったが、「印象低群」では、絵画鑑賞前よりも絵画鑑賞後のほうが低下した。さらに両群ともに、絵画鑑賞前よりも言語的描写法後のほうが低下した（図1）。

② “倦怠” 因子得点の変化

分散分析の結果、交互作用はみられなかった。

「印象高群・低群」の主効果は有意でなかったが、「絵画鑑賞・言語的描写法」の主効果に有意傾向があった（ $F(1.54, 58.33)=2.74, p<.10$ ）。そこで、同様に Dunnett の多重比較を行なった。その結果、「印象高群」のみ、絵画鑑賞前より絵画鑑賞後のほうが低下した。また、「印象低群」には、有意な変化はなかった（図2）。

③ “不安” 因子得点の変化

分散分析の結果、交互作用がみられた（ $F(2, 76)=14.02, p<.01$ ）。Dunnett の多重比較とLSD法による多重比較を行なった結果、「印象高群」では、絵画鑑賞前より絵画鑑賞後に低下した。さらに、絵画鑑賞前よりも言語的描写法後に低下した。一方、「印象低群」では、絵画鑑賞前と絵画鑑賞後に変化はなく、絵画鑑賞前より言語的描写法後に高くなる傾向があった。そして、言語的描写法後の「印象高群」と「印象低群」では、「印象低群」の方が、有意に高かった（図3）。

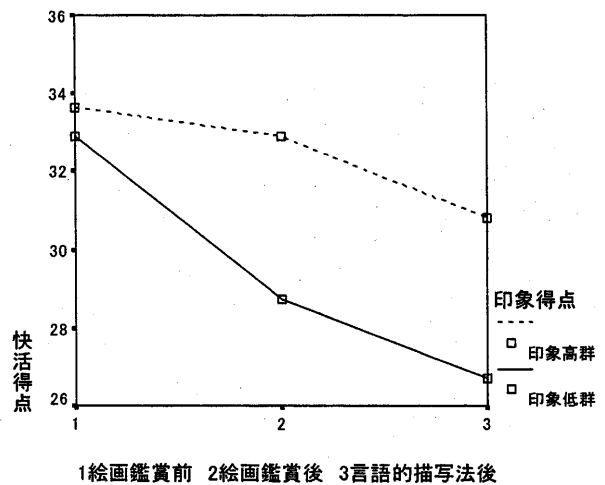


図1 “快活” の印象高群・低群の平均値の変化

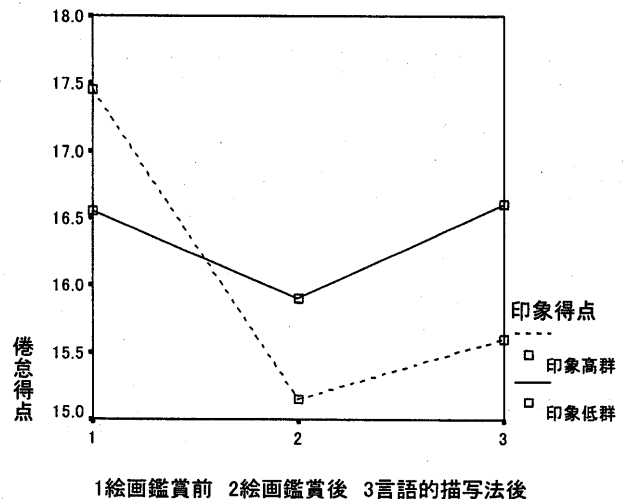


図2 “倦怠” の印象高群・低群の平均値の変化

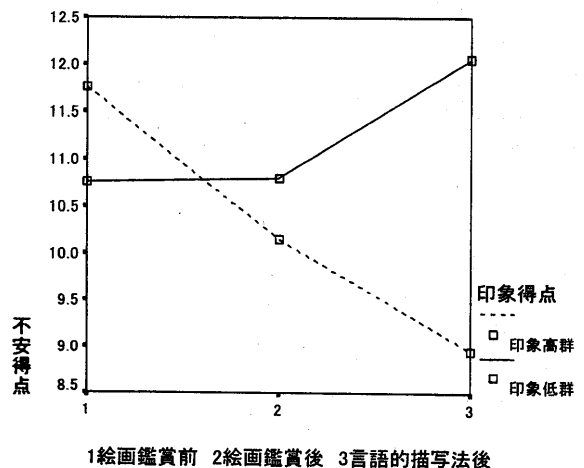


図3 “不安” の印象高群・低群の平均値の変化

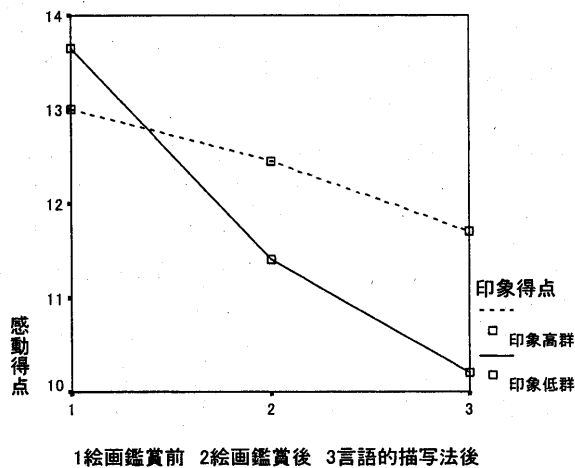


図4 “感動”の印象高群・低群の平均値の変化

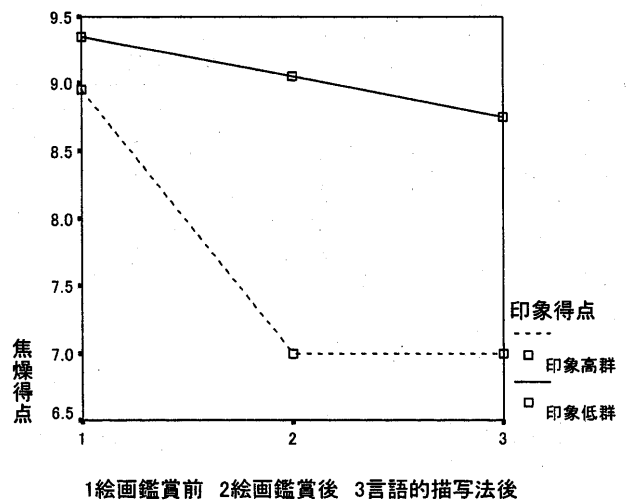


図5 “焦燥”の印象高群・低群の平均値の変化

④ “感動” 因子得点の変化

分散分析の結果、交互作用に有意傾向がみられた $F(1, 57, 59.78) = 3.06, p < .10$ 。Dunnett の多重比較と L S D 法による多重比較を行なった結果、「印象高群」では、絵画鑑賞前と絵画鑑賞後の間に変化はないが、絵画鑑賞前より言語的描写法後に低下する傾向があった。また、「印象低群」では、絵画鑑賞前より絵画鑑賞後に低下し、さらに絵画鑑賞前より言語的描写法後に低くなった (図4)。

⑤ “焦燥” 因子得点の変化

分散分析の結果、交互作用に有意傾向がみられた ($F(2, 76) = 2.58, p < .10$)。Dunnett の多重比較と L S D 法による多重比較を行なった結果、「印象高群」では、絵画鑑賞前より絵画鑑賞後に低くなったが、言語的描写法後には変化はなかった。そして、「印象低群」では、絵画鑑賞後も言語的描写法後も変化はなかった (図5)。

⑥ “哀愁” 因子得点の変化

分散分析の結果、交互作用はみられなかった。また、「印象高群・低群」、「絵画鑑賞・言語的描写法」のどちらの主効果も有意でなかった。つまり、両群とも、絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後に変化はなかった (図6)。

⑦ “リラックス” 因子得点の変化

分散分析の結果、交互作用がみられた ($F(2, 76) = 4.11, p < .05$)。Dunnett の多重比較と L S D 法による多重比較を行なった結果、両

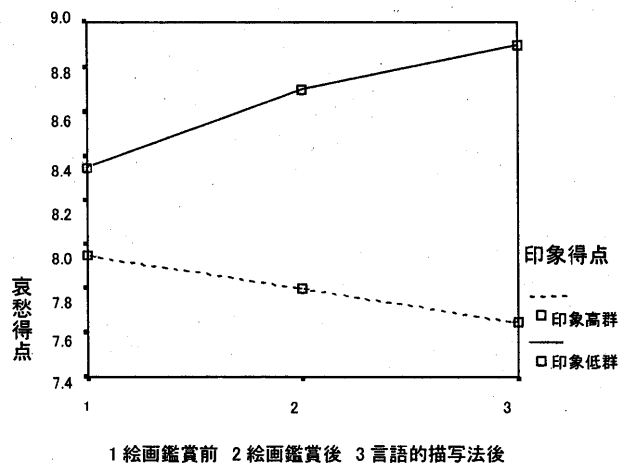


図6 “哀愁”の印象高群・低群の平均値の変化

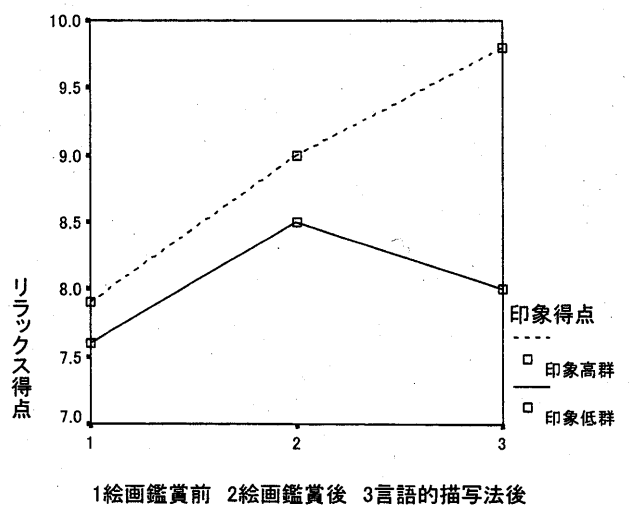


図7 “リラックス”の印象高群・低群の平均値の変化

群とも絵画鑑賞前より絵画鑑賞後に高くなった。そして、「印象高群」のみ、絵画鑑賞前より言語的描写法後のほうがさらに高くなった(図7)。

(3) 呈示画の好みによる絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の気分の変化

鑑賞した呈示画にかかわりなく、対象者60人のうち、絵画の好みについての尺度の総合得点の上位・下位30%を、それぞれ「好み高群」「好み低群」とした。t検定の結果、両群には有意差があった(両側検定： $t(38)=13.31, p<.01$)。したがって、確かに印象高群・印象低群であると言える。

次に、各7因子別に、2(好み高群・好み低群)×3(絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後)の2要因の分散分析を行なった。その結果、7つの因子全てにおいて、絵画の印象高群・低群とほぼ同様の結果がみられた。

考 察

(1) 気分の因子ごとの絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の変化

呈示画の種類によって、絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の気分の変化に違いはみられなかった。また、呈示画の印象と好みによる絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の気分の変化は、ほぼ同様であった。そこで、気分の因子ごとに、絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の気分の変化について考察する。

まず、「快活」因子は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞後と言語的描写法後に次第に低下しており、鑑賞前と言語的描写法後の間にみられた有意差は、両方の効果によるものと考えられる。また、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞だけでは低下しないが、言語的描写法によって低下した。一方、印象があまり良くなく好みでない絵画であれば、絵画鑑賞するだけで低下した。つまり、快活気分が低下するのは、印象があまり良くなく好みでない絵画を鑑賞した場合であり、印象が良く好みの絵画の鑑賞だけでは快活気分は低下しないことが明らかとなった。

「倦怠」因子は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞によって低下する傾向がみられたが、言語的描

写法による変化はみられなかった。印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞によって低下したが、言語的描写法によっては変化しなかった。つまり、印象が良く好みの絵画を鑑賞することによって、倦怠気分は緩和されるが、言語的描写法による効果はみられないことが明らかとなった。

「不安」因子は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞によって低下したが、言語的描写法による変化はみられなかった。また、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞後と言語的描写法後に次第に低下しており、鑑賞前と言語的描写法後の間にみられた有意差は、両方の効果によるものと考えられる。一方、印象が良くなく好みでない絵画であれば、絵画鑑賞による変化はないが、言語的描写法によって、高くなる傾向があった。つまり、印象が良く好みの絵画を鑑賞し言語的描写法を行なうことによって、不安気分は緩和されるが、印象が良くなく好みでない絵画の場合は、言語的描写法によって逆に不安気分が高まってしまうことが明らかとなった。

「感動」因子は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞後と言語的描写法後に次第に低下しており、絵画鑑賞前と言語的描写法後の間にみられた有意差は、両方の効果によるものと考えられる。また、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞だけでは低下しないが、言語的描写法によって低下する傾向があった。一方、印象が良くなく好みでない絵画であれば、絵画鑑賞後と言語的描写法後に次第に低下した。つまり、感動気分を低下させるのは、印象が良くなく好みでない絵画の場合であり、印象が良く好みの絵画の鑑賞だけでは感動気分は低下しないことが明らかとなった。

「焦燥」因子は、呈示画Aは、絵画鑑賞によって低下したが、言語的描写法による変化はなかった。呈示画Bは、絵画鑑賞によって変化しないが言語的描写法によって低下する傾向がみられた。また、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞によって低下したが、言語的描写法によっては変化しなかった。そして、印象が良くなく好みでない絵画の場合、変化はなかった。つまり、印象が良く好みの絵画を鑑賞することによって、焦燥気分は緩和されるが、言語的描写法による効果はみられないことが明らかとなった。

「哀愁」因子は、呈示画の種類や呈示画の印象ならびに好みの違いによって、絵画鑑賞と言語的

描写法による変化はみられなかった。

“リラックス”因子は、呈示画A・Bともに、絵画鑑賞によって高くなり、言語的描写法によっては変化しなかった。また、印象の良し悪しや好みであるか否かにかかわらず、絵画鑑賞をすることによって高くなった。さらに、印象が良く好みの絵画であれば、言語的描写法によっても高まった。つまり、印象が良く好みの絵画であることが、リラックス気分を最も高めることが明らかとなった。

以上のように、7つの因子の中で、全体的に低下傾向にあったのは、“快活”“倦怠”“不安”“感動”“焦燥”の5因子であった。なかでも印象が良く好みの絵画であれば、“倦怠”“焦燥”は絵画鑑賞によって、“不安”は絵画鑑賞と言語的描写法の両方の効果によって、緩和された。一方、“快活”“感動”を低下させるのは、印象が良くなく好みでない絵画の場合であることも明らかとなった。

高田・黒須(1997b)は、病院での絵画の効果として、スタッフの「忙しい業務の中でゆとりと優しい気持ちの喚起」、患者の「心の癒し、不安の軽減」を挙げている。また、山野(2002)は、ヒーリングアートの必要性として、「落ち着く」という意見が多かったとしている。このように、“倦怠”“不安”“焦燥”の緩和は、絵画鑑賞による好ましい心理的效果であると捉えられる。

そして、“リラックス”は、絵画鑑賞することによって、呈示画や印象、好みにかかわらず上昇した。印象が良く好みの絵画であれば、言語的描写法によってもさらに上昇した。したがって、どのような絵画であっても絵画鑑賞にはリラックス効果が期待でき、印象が良く好みの絵画であれば、さらにリラックス効果が高まることが期待される。山野(2002)は、病院に飾る絵としてヒーリングアートを取りあげ、「殺風景な空間を少しでも明るくし、また快適さを取り入れた空間へと改善していくため、要所要所に患者の心を和らげ、リラックス効果を目的とした作品」と定義している。このように、絵画鑑賞に対するリラックス効果の期待は大きいものと考えられる。したがって、“リラックス”因子の上昇は、絵画鑑賞による好ましい心理的效果であると捉えられる。

以上のように、“倦怠”“不安”“焦燥”の緩和や“リラックス”の高まりにみられる、絵画鑑賞

による好ましい心理的效果として、落ちついた、安らかな、ゆったりした気分をもたらすことがあげられる。また、“快活”や“感動”は、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞によっては低下しなかったものの、全体的には低下する傾向があった。しかし、これはネガティブなものではなく、絵画鑑賞によって生じた気分の落ち着き・沈静であると解釈される。

(2) 絵画鑑賞と言語的描写法の効果の比較

“倦怠”と“焦燥”は印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞によって緩和されるが、言語的描写法によっては変化がみられなかった。“不安”は、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞と言語的描写法の両方の効果によって緩和されたが、印象が良くなく好みでない絵画の場合は、絵画鑑賞によって変化はないが、言語的描写法によって逆に高めてしまうマイナスの効果の傾向がみられた。“快活”と“感動”は、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞では変化しなかったが、言語的描写法によって低下した。“リラックス”は、絵画印象や好みにかかわらず絵画鑑賞によって高まり、印象が良く好みの絵画であれば言語的描写法によってさらに高まった。

つまり、絵画鑑賞には、主に印象が良く好みの絵画を鑑賞することによって、好ましい心理的效果を期待することができるが、言語的描写法を行なうことで、絵画鑑賞よりさらに好ましい心理的效果を期待することは難しいと考えられるだろう。しかし、ここで調査手続きについて考慮したい。本研究では、絵画鑑賞および言語的描写法による心理的效果を測定するため、絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後の順で、同様の質問紙を3度繰り返して実施している。その繰り返しの、飽きや面倒臭さが生じ、言語的描写法後の測定に影響を及ぼした可能性があると推測される。

(3) 絵画の印象・好みの高群と低群の比較

“快活”“感動”は、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞によって低下することはなかった。しかし、印象が良くなく好みでない絵画の場合は、絵画鑑賞のみでも快活気分は低下し、感動気分は絵画鑑賞後と言語的描写法後に次第に低下した。“倦怠”と“焦燥”は、印象が良く好みであれば絵画鑑賞によって緩和されるが、印象が良

くなく好んでない場合は、変化はみられなかった。

“不安”は、印象が良く好みの絵画であれば、絵画鑑賞と言語的描写法の両方の効果によって低下したが、印象が良くなく好んでなければ、言語的描写後に高くなってしまった。“リラックス”は、印象が良く好みであれば、絵画鑑賞のみでなく、言語的描写法によってもリラックス気分をさらに高めることができた。

以上のように、呈示画の種類にかかわらず、印象が良く好みの絵画を鑑賞することが、絵画鑑賞による好ましい心理効果をもたらすことにつながっていると考えられる。つまり、「どの絵画を鑑賞するのか」ではなく、「鑑賞者が絵画に何を感じたのか、どう感じたのか」が、絵画鑑賞による心理的効果の要になっていると考えられる。

(4) 今後の課題

まず、絵画鑑賞前・絵画鑑賞後・言語的描写法後と、3度繰り返し同様の質問紙を実施したことにより、言語的描写法を正確に測定できなかったおそれがあるため、調査手続きの再検討が必要である。また、印象を測定する尺度項目が、好ましい印象の程度のみを測定するものであり、好ましくない印象を測定するための項目が含まれていなかったことについても再検討するべきであろう。前衛的な作風で有名な画家の美術展などを除けば、病院やカフェ、レストラン、ホテルのロビーなど、一般的に多くの人々が利用し絵画と触れ合う機会の多い場所に、印象の悪いような絵画を飾ることはないのではないかという、固定観念があったように思う。さらに、今回、絵画鑑賞による心理的効果を気分の変化を指標として検討したが、今後、これ以外の指標によるさらなる検討が必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 荒木紀幸 1981 絵画鑑賞に関する心理学的研究
宮崎大学教育学部紀要, 49, 1-29.
- 後藤茂樹 1971 現代世界美術全集2 モネ 集英社
- 市原洋右 1968 絵画鑑賞の心理学的分析 都立大学人文学報, 62, 113-139.
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司 1999 心理学辞典 有斐閣 215.
- 岡田守弘 井上純 1991 絵画鑑賞における芸術性評価要素に関する心理学的分析 横浜国立大学教育紀要, 31, 45-66.
- ラドフォード(Radford, R) 岡村多佳夫(訳) 2002 岩波世界の美術ダリ 岩波書店
- 坂野雄二・福井知美・熊野宏昭・堀江はるみ・川原健資・山本晴義・野村忍・末松弘行 1994 新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討 心身医学, 34, 629-636.
- 高田知恵子 黒須正明(1997a) 絵画鑑賞療法—アートセラピーへの新しい試み— 臨床描画研究XII 日本描画テスト描画療法学会 金剛出版, 182-202.
- 高田知恵子 黒須正明(1997b) 病院の絵画環境調査(病院にはどんな絵があるか) 絵画鑑賞療法の基礎的研究5 描画テスト描画療法学会15
- 高木敬雄 1979 絵画鑑賞に関する心理学的研究 広島修大論集人文編, 20, 49-80.
- 寺崎正治 岸本陽一 古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.
- 山野雅之 2002 公共のデザイン・病院におけるヒーリングアート デザイン学研究特集号, 7(4), 66-71. 日本デザイン学会

(わたなべ あや 生活機構研究科生)

(しまたに まきこ 生活機構研究科)